

くまもとの米レベルアップ技術対策資料



令和2年3月

熊本県農林水産部生産経営局

目次

I	土づくり	
1	土壌の改善目標値	1
2	作土深の確保	2
3	有機質資材の施用	3
4	土壌改良資材の施用	4
II	施肥	
1	稲作における施肥の基本的な考え方	5
2	省力・低コスト型施肥	6
3	レンゲ米	8
4	水稻の養分収支と飼料用米やWCS等における留意点	11
III	育苗	
1	理想的な苗の姿	12
2	床土の準備	13
3	種子の準備	14
4	播種及び育苗管理	16
5	育苗期の病害・障害	20
IV	本田管理	
1	本田準備	29
2	移植	30
3	水管理及び生育調節	32
V	収穫・乾燥・調整	
1	落水時期	39
2	刈取	39
3	乾燥	40
4	玄米調製	42
5	籾摺作業	42
VI	外観品質	
1	外観品質による分類	43
2	被害粒とその発生要因	44
VII	生育診断	
1	収量構成要素の仕組みと増収	46
2	理想型稲6つの条件	50

II 施肥

1 稲作における施肥の基本的な考え方

施肥の目的は、作物が必要とする養分を効率よく吸収させ、求める品質の農産物を安定的にたくさん生産することである。また同時に、省力・低コストで環境に配慮した施肥技術でなければならない。施肥量は、その作物（品種）の養分吸収量に対する土壌や有機物等から養分供給量によって決まる。とりわけ水稲は地力依存的であり、無窒素の条件でも三要素施用の7割もの収量を維持できる。「水稲は地力でとれ」といわれるように地力窒素の発現を考慮して、不足分を施肥で補うという考え方が基本となる。これは土壌の可給態窒素発現やリン酸の有効化、ラン藻類による窒素固定、灌漑水からの養分供給など水田における湛水条件が関係している。また、水稲では作型や品種による差も考慮する。

第2-1表 水稲の施肥基準

(kg/10a)

作型	施肥体系(時期)	窒素	リン酸	カリ	その他
早 期	基肥	3~4	10	4~5	【水稲全体共通事項】 ・主要品種については品種別栽培マニュアル参照。 ・ほ場の地力に応じて施肥量は加減する。特に野菜跡地等では前作の残肥を考慮する。 ・緩効性肥料を用いる場合は、施肥量を1~2割削減する。 ・穂肥は生育状態に応じた施用時期・量とする。 ・穂肥Ⅰは出穂前20日、穂肥Ⅱは10日前を標準とするが、品種により適期は異なる。 ・土壌改良資材による石灰、リン酸、ケイ酸等の補給を図る。 ・有機物を積極的に投入し、地力の維持増進を図る。
	追肥 (活着肥)	(2)	(+)		
	穂肥Ⅰ	2	(+)	2~3	
	合計	5~8	10~12	6~8	
早植え 普通期 晩 期	基肥	4~5	10~12	5~6	
	追肥 穂肥Ⅰ	3	(+)	2~3	
	穂肥Ⅱ	0	(+)	2	
	合計	7~9	10~14	9~11	
晩 期 (もち)	基肥	4~6	10~12	5~6	
	追肥 穂肥Ⅰ	3	(+)	2~3	
	穂肥Ⅱ	2	(+)	2	
	合計	9~11	10~14	9~11	

※ (+) は若干量の施用が考えられる場合